特別連載
Vol.13

野球体育博物館

「1931（昭和6）年 日米野球 全日本ユニホーム」

1931（昭和6）年、ゲーリッグ選手やグローブ投手ら、後に米国野球殿堂入りを果たす名選手を中心とした大リーグ選抜チームが来日し、日米野球が開催されました。現在のプロ野球が誕生する3年前、当時は東京六大学が日本球界をリードしており、その現役、OB選手からなる全日本チームが結成され、大リーグ選抜と対戦しました（4戦全敗、その他の大学、社会人等のチームも全敗）。

今回ご紹介するのは、この全日本チームのユニホームで、エースとして活躍した伊達正男投手（早大、1955～59年阪急ブレーブスコーチ）が着用したものです。

胸マークは「NIPPON」、左袖には開催年の“1931”と日米両国の国旗をデザインしたワッペンが付けられています。肘が隠れるほどの長い袖は、当時流行のスタイルで、生地は厚手のウールが使用されています。襟の内側には松屋銀座のロゴ（松鶴マーク）と“MATSUYA”の文字が入ったタグが付けられており、デパートのテーラーメイドだったようです。

そして、このユニホームには背番号“1”が付けられています。

ユニホームに背番号が付けられるようになったのは1929年で、大リーグのインディアンズとヤンキースの2球団が最初です。ファンが選手を識別しやすいようにと付けられました。他球団もこれに続いて広まり、日本ではその2年後の1931年、第8回選抜中等学校野球大会で試験的に採用されたのが最初といわれ、この日米野球の全日本でも背番号が採用されました。いわば、「背番号の草創期」の1着で、当館の収蔵品の中では最古の背番号付ユニホームです。